

---

# 我検索中されど思考中 1 (自分の居場所をしる)

へびモタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

我検索中されど思考中 1（自分の居場所をしる）

### 【Nコード】

N2484Y

### 【作者名】

へびモタ

### 【あらすじ】

前回の遭難からやっとのこと町まで降りてきたと思ったがそれはまだ始まりに至らない序章であった。

## 我検索中されど思考中 1 (自分の居場所をしる)

森を抜けた先にあつたものはアスファルトの道路でもなく、また同じ火山灰混じりの道が続いていた。

歩く事10分程で森は草原に序所に姿を変え、畑が見え始め、街の光源が加わり始めた。

だが、そのとき俺の内心は困惑と恐怖が渦巻いていた。

畑、畑、畑、なんでこんなところにあるんだ。この富士の駐屯地の裏手で畑やつてる所なんてあるはずない。

まだここは国有地だぞ。有るわけないんだ。

それに、光源があるようで全くない、なんだうっすらしたあの光、よく見ると電柱もない、見える光はまるで減光したライトの明かりか？なにかの統制訓練でワザと外に光が漏れないようにしてるのか？頭の中に次から次に疑問が湧き出してくる。感情で頭がパンクしそうになる。目の前がチカチカする。

壊れそうな頭を冷やすため、大きく深呼吸しながら周辺を確認する。ここがどこであれ、とにかく自分のいる場所を確認し知らなければ、もしかして自分の知らない山村があつたのかもしれない。街にいけばなにかがわかるはずだ。自分で自分を勇気づけ、重い足取りだが前進を再開する。

畑を抜け、光源がしつかりと確認できる距離に近づけ、そして俺の困惑は最大になった。

まるで時代劇のように木の柵で周りを囲み、道の出入り口には門がある。そして門番が立っている。

もしかして、俺は映画の撮影現場にでもきたのか？困惑しつつ取り敢えず門番している人にでも聞けばなにか解るかもしれないと思いつ尋ねる。

「すいません、ここどこでしょうか？」

相手はうっすらと半分目をつぶっていた。そのため、こちらに気が

ついでいなかっただのかもしれない。

俺が話すと慌ててその場から跳ね飛ぶと腰に付いていた剣を抜く

「てめえ、何もんだ？なにしに来やがった？」

門番はさっきの態度を誤魔化すように大きな声でこちらを威嚇し剣を向け怒鳴ってくる。

「あの、すいません道に迷ってしまったって今いる場所が知りたいんです。映画の最中か分かりませんが教えて欲しいんですが」

「何いってんだおめえ映画ってなんだ、ここはオオツキ村だ、それ以外に村なんて有るはずねーだろが」

門番は威嚇の姿勢は崩さず一応知りたい事は答えてくれた。オオツキ村？村か、そうなると俺は全く別の知らない所を歩いていたのかって「「「「「「「「「「「オオツキ村ってなんだよそんなのこの当たりにはねーぞ、いつたいここどこだよ？」

一人頭を抱えて、頂垂れる。

門番はこちらの様子に困惑しているのか一応剣は下ろしたが気は抜いてない。眼光だけこちらに向けながらしっかつとした口調でいう。

「お前いつたいなに者だ？この村に何しにきた？答えろ」

「自分は陸上自衛隊10師団33連隊九条守士長です。行軍の際に道に迷いました。ここは静岡県側ですか？それとも山梨県側ですか？」

正直に自分の置かれている状況を話すと相手も一瞬考えたのかこちらをみて一歩後退し、剣をしまう。

「お前さんのいつている自衛隊っていうのはよくわからないが迷ったのは理解できた。取り敢えずお前さん一人か？もつと沢山いるのか？」

「いえ、一人だけです。できれば電話か何か貸していただきたいのですが」

「お前さんが一人だけなのはわかった。で、電話とはなんだ？」

話が噛み合っていない、何言ってるんだこいつ、電話だよ電話、いくら映画の撮影でもそこまでボケル必要ないだろコノヤロウ。

内心いらだちを募らせながら口調を強くする。

「電話ですよ、いくら映画っていつてもこちらはマジで迷子で困ってるんです貸してください。映画の最中に来てすいませんが早く連絡しないといけないんです。」

こちらの口調にかなり困惑しながら門番はじと目でこちらを睨む。

「おまえさんが何をいつてるのか今いち判らん、映画だの電話だの知らん事を言われても困るんだが、取り敢えず、迷って気が立っているかも知れんが落ち着け、な、」

やさしく諭す様に言う言葉だが、俺からしてみればその言葉は困惑しか生まない。

「すいません、もっと上の監督がプロデューサーを呼んでいただけませんか？お願いします。」

こちらの言葉に門番はさらに？マークを追加して答える。

「さつきからお前さん知らない言葉をいうな、監督とかプロデューサーってなんだ？そんなものはこの村にはおらんぞ、お前さんの連れか？」

埒があかない、この門番役相当のプロかここまでするのかプロって内心困惑から一種尊敬を持つがいい加減疲れてきたので取り敢えず中に入らせてもらう事にした。

「それでお前さんこれからどうすんだ？本来の目的地はどこなんだ？」

門自体は普通に入ってもよいと返事がきたので入るが門番が尋ねてくるので一応答える。

「明日には富士駐屯地に行きたいのですが方向と距離を教えていただけませんか？」

「なあ、さつきからお前さん知らんことばかり言うんで困るのだが、富士駐屯地とはなんだ？」

「いや、富士駐屯地です。自衛隊の富士駐屯地、もしかして知りませんか？」

「すまんがしらんな、この当たり一体にはこの村以外ないぞ、確か

10 里程行った所に別の村はあるが徒歩だと一日はかかるぞ」

一応分かりましたと伝え村の中に入る。門番は寝るなら村長の家に行って旅人だと言えば軒先位貸してくれるぞと言っていた。それにははいはいと手を振り答える。

村の中は木造平屋だての家が軒を重ねている。屋根は板葺で藁葺きではない。内心ここはなんの映画の撮影所だと思い、ちらちら周りを見ながら歩く、周りには人影がなく明かりもなく閑散としていた。少し歩くと他の家と比べ大きな家が見えてきた。村長の家はやっぱり豪華だと思いつながら一応間違っていないか確認のためにノックをする。

すると扉の一部が横に滑り誰かが顔をだす。

一瞬目が点になる。その顔は茶髪に赤い瞳、なにに着ている物は着物風、いったい何の時代劇だ？色々考えるがこの子一人で作品が特定出来なくなる。

「あの一、あんまりじつと見つめられると困るのですが。。。」「  
女の子はちょっと恥ずかしいのか目を逸らす、こちらは正直思考中でそれどころではなかった。

「あのすいません、このセットで一体なんの時代劇を撮っているんですか？題名教えて戴けませんか？」

こちらの問いに女の子はきょとんとした顔をした。もしかしてこの子もか？

「すいません、映画ってなんですか？時代劇もどろという意味ですか？」

さっきの門番と同じ答えが帰って来て、こちらの苛立ちは高まる。

「ねえ、頼みます、こっちは結構切羽詰まってるんです。部隊とはぐれ、いまごろみんなして自分を搜索しているはずなんです。早く帰らないと大事になるんです。お願いします。連絡が取りたいんです電話を貸してください。」

頭を90度に曲げこちらの誠意をしっかりとアピールする。もしこれでまだ演技を続けるのならもう暴力に訴えるのも選択肢に入ろう

としていた。

しかし、結果は門番と同じだった。

「すいません、私無知なんで電話がどんなものなのか解らないんです。あなたが必死なのは様子で判るんですが・・・すいません」

どうなつてんだ？いくら演技が必要っていつてもこちらは国家公務員で国家機関のモンだぞ、いくら何でもこの扱いはおかしくないか？自衛隊に恨みでもあんのか？

そして、俺は一つの嫌なとても嫌な考えが浮かんだ。この選択肢は自分を拘束する、限定する、逃げ場を失なわせる、そんな考えだった。でも聞かないというもう選択肢はでてこなかった。

「すいません、今年の年号は幾つですか？」

「年号ですか？年号は確か東方歴1404年だったと思います。」  
「なんにも疑問に感じる事なく少女は答える。」

その返答にこちらは固まる。

ん？なんだ東方歴って？普通は日本史の年号って文明とか応仁とか時代事にあるだろ。なのに東方歴1404年ってなんだよ。聞いた事ないぞ。

「すいません、後ここの県名教えてもらえませんか？」

この問いをしたとき多分俺の声は震えて不自然に聞こえたと思う。  
正直この質問もしたくなかったのだ。

「私たちの国の名前はメイジンですよ、よく聞く名前でしょ？」

聞いた事ねーよそんな名前、日本じゃねえのか、いったいどこ  
の地名だ？

「最後に聞きたいのですが、私は隣国からきたのですが道中にこの村の方に大勢の軍勢がせまってきているのみたので知らせようと急いできたのですが、なぜみなさん何も準備してないのですか？」

今言ったのは全て今考えた嘘っぱちである。嘘であるがこの反応で自分の考えは確信に変わる筈だ。

「ほ、ほんとですか？隣国といいますとコウライ国ですか？ありがとうございます。」

俺の言葉に彼女は慌てて中に戻ろうとする。しかし、俺は女の子の肩を引き留める。

女の子は俺の手を離そうとする勢いで中に戻そうとするがこちらも戻らせまいと踏ん張る。

「なんで肩を掴むのですか？あなたの情報は聞きました。今すぐに父に話さなければなりません。離してください。」

少し苛立ちの籠った声でこちらに視線を向ける女の子に俺は告げる。「今は嘘だ。ちょっと様子を見ようと思ったただけだ、軍勢なんてきていないよ」

こちらの声に一瞬気配が変わった。落ち着いたのかなと思ったがそれだけではないようだ。

女の子は視線に若干苛立ちを込め、こちらを睨む。

「あなたなんでそんな嘘いうんですか？もし今話を私が父に話していたら大騒動になっていたところですよ？」

「嘘にも言っていない嘘と悪い嘘があります。その位弁えてください。」

女の子の声は怒りが混じっていたがそれは甘んじてくれる。受ける事ぐらいしか出来ない。

急に膝に力が入らなくなった、背中の背囊が一気に重くなる。そして全身に重くのしかかる。しかし、それを支える力はなかった。

俺はそのまま倒れ意識を失った。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2484y/>

---

我検索中されど思考中 1（自分の居場所をしる）

2011年11月5日18時21分発行